



ニューヨーク補習授業校
平成二十九(二〇一七)年度

卒業式特集号

2018年4月21日発行

平成二十九(二〇一七)年度卒業証書授与式

平成二十九年三月十八日(日)午前十時十五分から、ニューヨーク補習授業校の卒業証書授与式が、アルバート・レオナルド・ミドルスクールで行われました。

式は厳粛な雰囲気の中で行われ、例年以上に素晴らしい卒業式となりました。卒業生の皆さんは、緊張した中にも晴れやかで自信に満ちた表情で式に臨み、初等部七十三名、中等部十七名、高等部二十三名、計百十三名が巣立っていきま

した。ここに紹介する「送辞」「答辞」には、代表者の児童・生徒だけでなく、補習授業校に学ぶすべての子どもたちの、これまでに経験してきた様々な体験や苦勞、そして深い思いが凝縮されています。

楽しかったこと、苦しかったこと、そして悲しかったことなど、列席したすべての人が、その一言一言に共感し、時には涙をさそわれる場面もあり、会場は感動に包み込まれました。

卒業式今回の補習校だよりを通して、補習授業校の教育の原点と魅力をあらためて考えるきっかけとしていただければ幸いです。

Li校初等部 6年1組	Li校中等部 3年	Li校高等部 2年	W校初等部 6年1組	W校初等部 6年2組	W校中等部 3年	W校高等部 2年
アクティ アンジ エロ 勝	フィッシュマン 岩元 富士弥	アナビアン マックスウエル	荒木 アリス 芽依	アンブ ロージ フェリシア 真雪	阿部 純子	荒木 アレックス 信太郎
アナビアン ビクター	宮澤 怜央	新井 美彩	チャドウィック エリザベス	荒井 聖山	荒木 スタンリー 翔満	ホルト ウィン 吉田 紗
アントラテ 美咲	大宮 周磨	平形 将都	フィッシャー グレース	ビエム シアナ 彩美	ビエム アデア 奈月	デビッド キャロリン 美雨
コルテス 古屋 夏美	サクリハンテ アンジ エロ	ハッセンバック よな	神谷 心彩	コリー 美木子	榎島 蓮太郎	福島 大朗
福田 夏浦	滝澤 真佳	稲留 清香	小林 琢磨	デビッド クリストファー 想太	勝野 空詩	本庄 悠輝
古屋 レオナルド		石田 丈士	河野 真理咲	藤田 修敬	川原 恵実	細野 露可
畑崎 優里		木田 マーク	是永 真凜	船越 あかり	是永 陸	松野 恵美里
飯田 二朗		中村 夢乃	的場 千奈	ハガソ ジョン	パルメリ ケイシー	宮部 航一
吉川 菜里奈		サリバン 花理	戸塚 ジョナサン 海	伊佐山 莉里香	スパークス 実亜	宮崎 竜太郎
北口 夏乃		高橋 悠真	森 そら	石塚 ケイトリン 祥子	豊村 真帆	押川 春香
前田 快哉			中島 佑治	河崎 さくら	若松 みなみ	清水 美緒
河本 マリアノ 元気			中村 開翔	小山 爽太	山岸 ホルテン	武神 美奈
松本 アレックス			中瀬古 想汰	松下 天美		都甲 健太
モンターク 未嗟			奥平 恵里奈	中山 モイ		
延原 伶			折田 梨緒	野並 大桜		
佐伯 穂ノ子			齊藤 譲	大西 琳太郎		
櫻井 ローラ			柴崎 勇輝	齊藤 謙		
サンファン 竹林 未来			ソウヤー 海 トマス	シュルツ 吾知		
園 慈瑛			スパークス 海	鈴木 雄大		
多喜 ソフィア			立花 尚美	高村 佳穂		
滝澤 佳和			寺門 滯	田中 せかい		
宇田川 初雪			富田 明花	塚田 圭梧		
山中 さくら			トロッタ 藤坂 アリア	ウォーカー 宇多 美咲		
			渡邊 慧	渡邊 喜		
			山中 樹	山下 ひより		

平成三十年三月十八日、今日は卒業生の皆さんにとっては、人生の節目となる日です。一つの区切りを迎えてほっとしていることでしょう。高2の皆さんは明日から、もう宿題に追われることもなく、解放感と寂しさが混ざったような気持ちではないかと思います。補習校は、幼児部から高等部まで続く十三年間の学校です。この長い学校生活でたくさんの先輩・後輩との出会いがあったことと思います。

日本の学校のような先輩・後輩のたて社会と違い、補習校では年が上であっても、ファーストネームで呼び合ったり、冗談を言い合ったり、はじめはあるけれども友達のような気楽に話が出来た関係でした。

昨年十一月に球技大会がありました。バレーボールの競技の時、私のグループのメンバーは、あまり運動が得意でなく、何となく「どうせ負けるから」というだらけた雰囲気でした。後輩の中学生も走り回って勝手なことをしていました。そんな状況の中で口数が少ない先輩は、胸を痛めていたことでしょうか。それなのにゲームブレイの時、後輩の私たちを責めることは一切ありませんでした。私たちがどんなミスをしてもみんなに平等にパスを投げ、言葉をかけていました。流れが変わったのは、一番ふざけていた子が先輩からのボールを受けた時です。先輩はうまくつなぎ、みんなの目の色が変わりました。「おおっ」となって私たちはその試合に夢中になり、勝ったのです。

中等部に進学して気が付いたことは、補習校は、ただ日本の教科書を学習するだけの場所ではないということです。全く違うバックグラウンドをもった子供たちが、「日本」というキーワードで、ある時期、ある場所でお会いしたという縁で深くつながる社会だったのです。

この社会は、たくさん歯車で回っています。大きな歯車の中心を直接回そうとすると大変大きな力が必要です。しかし、小さな歯車をいくつか組み合わせるとわずかな力で大きな歯車をたやすく回すことができるのです。歯車にはさまざまな面があり、他の歯車の面とうまくかみ合って初めて全体が大きく動きます。大きさも、形も役割も違う歯車たちが小さな力を出しあって、何倍もの力を生み出す、それはまさに社会の力学です。

補習校もひとつの社会の縮図です。そこには一人一人、個性の違う歯車たちがいます。リーダーの他に、調整役、ムードメーカーなど個性あふれた歯車たちが、それぞれの特徴を生かし、かみ合い、力を合わせて全体として機能しています。球技大会で先輩にパスを投げ続けた先輩は、そのことを知っていたのです。一人

の力には限界がある。でも小さな力であってもかみ合わせることで、大きな勝利を手にすることができる。それは、試合に勝った以上の喜びを感じた瞬間でした。

補習校の歯車は、一人の力では回せません。先輩たちが私たちの前に示してくれた姿、そのことがどれだけ心強く私たちを励ましてくれたか。先輩たちがいてくれたからこそ、道が開け、先輩たちが続いてくれたからこそ道は固まる。ここに集まっている補習校でお世話になったすべての方々在校生を代表して言わせて下さい。

「補習校という歯車の中で、小さくても一人ひとりの力がどれだけ全体に影響を与えるか、どれだけ大きな力を生むことができるか、私たちは先輩たちの姿から学びました。チームワークは、補習校の伝統であり、これから社会で生きていくうえでかけがえのないものです。大切なことを教えてくださって心から感謝しています。」

正直、先輩たちが四月から補習校にいないことは実感としてありません。風が吹きすさぶような、ぼんやりとした寂しさも感じています。だから私は「さようなら」の代わりに「じゃあまた、どこかで。」ということにします。いつか、また日本で、アメリカで、アフリカで、アジアで、世界のどこかで出会えるような気がします。私たちも先輩たちが長い時間をかけて築いてくれた補習校の道を、長く続く壮大な道を巣立ちの時まで歩いていきます。

最後になりましたが、「ご卒業おめでとうございます。一緒に過ごせた時間は私たちがかけがえのない宝です。」

答辞(一)

W校初等部卒業生代表 大西 琳太郎

ぼくは、一年生の時、アメリカに来ました。アメリカに来て、すぐに補習校に通い始めました。初めは、補習校がどのような場所か分かりませんでした。毎週通っている間に、補習校に少しずつ慣れてきました。

ぼくは、僕と同じ言葉話すクラスの仲間達と、週に一度会えることがうれしかったです。同じ言葉話すということは、その人達と共通することがあるということです。まだ英語がはなせなかったぼくにとって、補習校は、日本語で会話ができる落ち着ける場所でした。

補習校では、日本にいた時と同じような時間を過ごすことができました。まだアメリカの生活に慣れていなかったぼくにとって、補習校は日本とのつながりを感じられる場所でした。日本と全くちがうアメリカで、補習校は、大きな海の

中にうかぶ、小さな島のようでした。海に流されるよりも、ぼくは島の上にいる方が好きでした。

高学年になると、ぼくは、すっかり補習校にとけこんで、毎週登校するのが、より楽しくなりました。六年間通ったので、仲の良い友達もできましたし、先生とも仲良くなりました。

それに加えて、下級生との交流もあり、補習校の生活がさらに楽しくなりました。幼児部での読み聞かせや放課後クラブでは、小さな子ども達の楽しい、ふるまいで、笑ってしまうこともありました。運動会や六年生を送る会では、下級生ががんばる姿を見て、たくさん力をもらいました。

補習校に通うということは、大変なことですが、日本語と英語の両方を話せることはすごいことだとぼくは思います。

ぼくは、中等部に進級します。中等部になったら、より多くの友達を作りたいです。友達のいない学校へ行くのは、とてもつらいことです。ですから、もし、転入生が入ったら、その子の友達になりたいです。

ぼくは、補習校に通うことで、たくさん貴重な体験をすることができました。友達もできましたし、日本語で多くのことを学ぶこともできました。中等部では、初等部よりも勉強が難しくなり、現地校との両立が大変になると思います。でも、ぼくにとって特別な場所である補習校で、たくさん友達と一緒に、いろいろな経験をして、これからも補習校の生活を楽しんでいきたいです。

答辞(二)

―校初等部卒業生代表 畑崎 優里

人一倍恥ずかしがり屋でクラスでもめったに発言をしない私が、今日こんなに大勢の人の前に立っている―新先生からクラス代表の答辞の話を聞いた時、口から心臓が出そうになりました。多分、先生はいつも教室で当てられないように隠れている私に、自信と勇気を持たせようとしているのだろう。そう思い、答辞をやるうと決めました。

それともう一つ、答辞を決心したのは「クラスの誰よりも補習校を知っている!」という自負があったからかもしれない。年中から通い始めた補習校。でも実はその四年前の生後三ヶ月から私の補習校生活は始まっていたのです。

私には補習校を高等部まで頑張って卒業した姉が二人います。その姉たちの付き添いで、赤ちゃんの頃から毎週土曜日補習校に通っていたのです。運動会、バザー、餅つき大会、安全当番。母におんぶされ、抱っこされ、見てきました。いざ年中に入園した時は「やっと自分の番が来た!」と、張り切ったものです。こうし

て私の「勝手知ったる補習校」生活がはじまったのです。

夏祭りやクリスマス会などの行事が盛り沢山の幼児部は、憧れていた通り、それは楽しいものでした。それが初等部に入り、勉強が難しくなり、宿題も多くなり、補習校の現実が見えてきたのです。現地校との両立も大変で、「土曜日が休みだったらなあ」と思うようになりました。現地校のみんながのんびり過ごす金曜日の夜と土曜日、補習校の宿題に追われ、朝早く起きて補習校に通わなくてはならないのです。きついなあ、と思いました。が、「行きたくない!」と母に反抗しても無駄なのは分かっています。姉達もそうでしたから。泣いたり意地をはったり母と戦っていた姉達も、笑顔で卒業し、今でも補習校と一緒に頑張った仲間と付き合っているのを見てきています。多分私もそうでしょう。高校卒業までのレールは敷かれています。

そんな敷かれたレールの上ですが、寄り道もせず、ストライキもせず走り続けてこれたのは、やはり、補習校が好きだったからだと思います。週に一度の限られた時間の中で色々な人に出会い、沢山のことを学び経験してきました。私と同じ境遇を分かち合える友人達、日本語や日本の文化・風習に興味を持つように導いて下さった先生方、様々な行事を盛り上げて下さった保護者会のお父様お母様方、励まし続けてくれた母、優しく見守ってくれた父、私に先立って、泣いて笑っての補習校ドラマを見せてくれた姉達。私をサポートしてくれたみんなに、沢山の有難うを送ります。

そして最後に六年一組のみんな! 二十二人の个性的なメンバー。みんながいたから頑張ってここまで来ました。有難う! 今日のみんなの最高の笑顔胸に、前進します。

答辞(三)

W校中等部卒業生代表 荒木 翔満

日ごとに温かさが増し、春を感じる陽気となってまいりました。本日は、多数のご来賓、保護者の皆様に見守られる中、このような盛大な卒業式を挙げていただきますことを卒業生一同、心より感謝いたします。

三年前私は不安や期待、様々な感情が溢れ出るのを抑え、身が引き締まる思いを胸に中等部の入学式を迎えました。

補習校へ入学して七年目にもかわらず私にとって全てが新鮮でした。初めての球技大会、初めての夏祭り、初めての冬祭り、そして何よりも初めての蚤の市。しかし、中等部に慣れてくると補習校は時に嫌々行き、時には遊ぶためだけに行く場所となっていたのです。そんな日々がこうも愛しくなるとは当時の私に

は知る余地がありませんでした。そして、現地校と補習校の両立に苦戦しながら迎えた中等部二年。新しく入ってくる中等部一年生の人数に驚き、憧れた「先輩」という存在へ一歩近付いたと感じる中、私にとって今までで一番衝撃的な出来事がありました。それは、「病氣」という名の試練でした。当時、脊椎側湾症の進行が酷かった私は、急遽手術を受けることになりました。背骨が曲がったことにより、肺が圧迫されて息苦しかったのです。手術がうまくいかなければもう歩けなくなるかもしれないという不安の中、手術は六時間かかり、強い痛みとともに目を覚ましました。そして、同時に私の闘病生活が始まりました。学校を二ヶ月間休学し、ろくに体を動かすこともできずただ一人でいる時間が多くなる中、元々少なかった体力や筋肉が衰えていき、残ったのは空虚感でした。この時初めて補習校での楽しい授業や仲間達との談笑がどれほど私にとって大事なのかを痛感しました。気がつくとは補習校へ戻れることは闘病生活での大きな精神的支えとなっていました。しかし、支えができたからと言って急に回復するわけではありません。そんな時、弱った心にぽっかりと空いた穴を埋め、私を支えてくれたのがクラスメイトとその保護者の方々でした。幼児部からの友達だけでなく、補習校へ来て間もない友達までも、私を励ましてくれました。中には遠くからわざわざ御見舞いに来てくれる友達もいて、みんなの温かい応援の気持ち嬉しく、病気に負けず、応援に答えようという気持ちになりました。あの時、クラスメイトが用意してくれた寄せ書きは今でもよく見える場所にあります。それを見るたびに、改めて補習校とは自分にとってどれほど大切なものと再確認します。もし、「君にとって補習校とは？」と誰かに聞かれたら、手術前の私なら大きく戸惑い、おそらく「勉強する場所」、あるいは「遊ぶ場所」とでも答えたでしょう。しかし、今なら断言できます。私にとって補習校とは居場所であり、支え合う仲間がいる特別な場所です。

そして中等部最高学年となった三年生。中でも一番良い経験となり、大切なことを学べたのは蚤の市でした。初等部の時、蚤の市とは見て遊ぶだけの行事でしたので、私は「与えてもらう側」でした。しかし、中等部になった今、私は「与える側」となりました。「蚤の市を成功させる」という大きな目的を持ち、それを成し遂げるための柔軟な発想やリーダーシップ、コミュニケーション能力などを磨くことができました。私にとって蚤の市とは、貴重な社会経験の場であり、自分の足りないものに気づく場所でもありました。

中等部での日々は、優しく、時には厳しく怖い、個性豊かな先生に囲まれていました。私達を支え、勇気をくださった先生方、また、毎週お弁当を作り補習校へと送ってくれる母。土日の楽しみであるゴルフをハーフで切り上げ、迎えて来てくれる父。何かにつけて厳しいダメ出しをする兄と妹。どうもありがたうご

ざいました。おかげで私は日本語をここまで話すことができるようになりました。

私には高等部になって、叶えたい「夢」があります。それは、補習校でしか味わえない喜びを後輩の皆さんにも感じてもらうことです。そして、そんな喜びを後輩の皆さんに与えられる先輩になりたいと思います。もちろん今の先輩たちのようになれるか不安もありますが、これは私の当初からの夢あり、どうしても叶えたい目標なのです。これからは先輩に一歩でも近づけるように頑張ります。そしてこの思いを胸に、私たちは今日、卒業します。

最後になりましたが、卒業生の皆さん。ご卒業おめでとうございます。卒業生の皆様のご健勝と更なる成長を祈り、答辞と致します

答辞(乙)

―校中等部卒業生代表 大宮 周磨

まだまだ寒さの残る今日このごろですが、日に日に日が長くなり、暖かな春の訪れを感じます。

今日、私達 1 校中等部三年一組の五人は中等部を卒業します。この内一人だけ、高等部へ進みます。ですから、私をふくむ四人は今日で補習校を本当に卒業します。

十二年前、母に手を引かれ幼児部へ入学をしました。さまざま行事で一年の季節を感じ、日本の文化や習慣を学びました。勉強よりも遊び時間に友達と話したり、走ったりする事に忙しかった、楽しかったばかりの初等部。先生方を困らせたり、怒らせたこともたびたびでした。

しかし、中等部になると色々自分達で考えて行動することが求められるようになりました。クラスの雰囲気も変わり、遠い存在だった先輩たちとの交流もできるようになりました。自分たちが急に「大人に近づいたような」そんな気持ちになったのを覚えています。

中等部になった時、クラスメイトは十四人いました。それが二年生になり、八人。そして三年生になった時、なんと女子一名、男子四名の小さなクラスになってしまいました。それでも私達五人は助け合って、色々なことをしました。運動会、秋祭り、球技大会、スピーチ大会。人数が少なく大変でしたが、協力しあって乗り越えて来ました。生徒会で行なった、バザーはとても楽しかったですね。

出会ってから十二年。毎週土曜日に会うのがあたり前だと思っていた友達。いっしょに笑ったり、怒ったり、おちこんだり。この友達がいたからこそ私は今日まで補習校を続けられたのだと思います。これからはみんなバラバラになってしまいま

すが、いつまでもいい友達でいたいと思います。みんな本当にありがとう。

そして、この十二年間、しんぼう強く、また、温かい心で指導してくださいました先生方。本当にお世話になりました。くじけそうになっても先生方はげましがあつたから、ここまでこれたと思っています。問題の多かった男子四人をしんぼう強く指導して頂き、本当にありがとうございました。

そして、お父さん、お母さん。毎週つかれているのに遠い学校へつれてきてくれてありがとうございます。宿題をやらぬことで毎週金曜日はケンカをしましたね。それでも、はげまして、ここまで続けさせてくれて本当にありがとうございました。

今日から私達五人はそれぞれの道を進んでいきます。これから色々なことがあると思います。苦しいこと、悲しいこと、もちろん楽しいことも。そんな時、この補習校で出会った人達、学んだ事を思い出し、自分をあげましてしっかりと前に進んでいきたいと思っています。

私達は日本人として、日本的な考えを理解し、そして自分の意見を日本語で書いて、話せるという力を補習校で与えていただきました。小さかった頃から、作文はにがてでしたが、中三、最後の作文コンクールで入選した時はとてもうれしかったです。この力をいつか近い将来に役立て、日本と世界をつなげる役割ができるといいと思っています。

最後に、一人で高等部へ進む滝澤さん。ぼくたちは応援していますよ。がんばってください。

本日はこのようなすばらしい卒業式をもよおして頂き、本当にありがとうございました。この補習校のますますの発展を心からおいのりし、答辞のことばといたします。

答辞 (V)

W校高等部卒業生代表 福島 大朗

とうとうやってきました。別れの、そして、涙の季節が。嫌々補習校に通っていた頃を、もがきながら成長してきた日々を、親子ともどもに振り返る日か。

早速なのですが、皆さんは「自己欺瞞」という言葉をご存知でしょうか。自分の本心を裏切り、心を偽ることを意味します。この言葉は僕の補習校生活を語る上で欠かせない、大切な言葉です。僕は、初等部低学年のときは発言するのを恐れ、存在感のかけらもない、平凡な生徒でした。友達などもないまま、終わりが見えない暗い補習校生活を送っていました。でも、初等部の卒業式がそんな僕を変えてくれました。

六年前、僕は初等部代表として、この同じ場所で、身長が足りなかったため台に乗りながら答辞を読んでいたことを、今でも鮮明に覚えています。あの時読んでいた答辞は、人生で初めて、素の自分をさらけ出して書いた作品でした。「答辞らしくなかった」からと選ばれた答辞は、感動よりも笑いを誘い、人見知りの僕に人前に立つ勇氣までくれました。この答辞をきっかけに、僕は真の自分を出すことの大切さを知りました。自分の殻を破らなければ、絶対悔いが残ると、自分に確信させてくれました。それ以来僕は、自分を偽るのをやめ、本心をあからさまに出すようになりました。

しかし、そうはいくものの、本音を出せなかったこともあります。蚤の市での出し物を企画していた時のことです。僕は皆とは別の意見を持つていました。しかし、今更反対意見を出しても迷惑だろうと思い、本心を完全に封じ込めました。振り返ってみれば、あれ程辛いことはありませんでした。頑固だからというのもありですが、思ったことを言えないというのは、屈辱的で、真の自分を貫けない自分が愚かだなど感じました。後にこの事を友達に打ち明けたら、「大朗らしくないね」と言われました。僕はこの言葉に大いに助けられました。「らしさ」とは、その人をよく理解しているから言えるのです。遠慮せず、本心を言うのが僕の「らしさ」なのであれば、自分は正直でいいんだ、容赦無く物事を熱く語る人間で僕は親しまれているのだと、実感しました。

人前でこんなことを言いたくないのですが、僕は、本音で付き合ってきた仲だからこそ、クラスメートたちを全員、親友だと思っています。「親友」というものは、お互い素を出し合える仲であってこそ親友なのだと思います。今に至るまで、数多くの人たちと親友になり、別れのたびに泣いていた僕が、この様に十二人と一斉に別れを告げるのですから、いつ涙腺が崩壊するの心配です。僕が今まで、厳しいことを言えたのも、みんなから受け入れられているという確信があったからです。このクラスでは、誰がどんな事を述べようと、その場の空気が決まらず、お互いをよく理解していました。お互いの個性を受け入れていました。このような場所だったからこそ、みんなここまで辿り着けたのだと思います。

断じて、高等部まで続ける意志を持って補習校に通い始めた人は一人もいないでしょう。毎年、進級・進学を断念しようとする級友がいたことは何よりも強い証拠です。中等部になると、高等部に上がるとき、誰かが迷い、進学を断念しようとして、でも、戻ってきてくれました。卒業まで後一年という、高二に上がる時、ある友人が退学届けを出しました。受験に備えるためという理由で。皆、彼という時間が一年早く終わる事を惜しみながら、学年と共に別れを告げました。ところが、新たに高二としてクラスに足を踏み入れた時、その友人がいつもの机にニコニコして座っていました。家で正直に泣いた僕の涙を返して

もりたいものです。でも僕は彼を目にした時、表情を崩さず普通にしています。が、内心は至福の感情で溢れていました。補習校に来て間もないとか、幼稚園の頃からの付き合いとか関係なく、どんな級友も一度は迷っても戻って来てくれる本当に嬉しく思いました。僕たちのクラスには戻ってくるだけの何かがあったのだと思います。一人一人が自分の本心を覆ってしまうと作り上げられない、特別で魅力的な何かが。僕たちが培ってきたこの空間から離れざるを得なくなったら、僕は初めて、心の底から、この補習校に十二年間通って良かったなどと思っています。

最後になりますが、卒業生の皆さん、卒業、おめでとうございます。この場で、皆様の代表として答辞を読ませて頂いたことを誇りに思います。今までこんな僕と共に過ごしてきた仲間たち、そして、僕達に何よりも輝かしい未来を築いてくださった保護者や先生の方、本当にありがとうございます。今後、アメリカに在住し続ける人もいれば、僕のように日本へ帰る人もいます。どちらにせよ、バラバラになってしまふことに変わりはありません。それでも、ここまで歩んできた道は同じです。この道が、正解だったということを確認するために、お互い世界各国に華麗な花を咲かす日を、待望しています。

そして、今後も補習校に通い続ける皆さん、今は補習校が面白くない、面倒臭い、土曜日の無駄、現地の友達たちと遊んでいたい、など思いがちだと思います。安心してください、僕もそうでした。しかし、長年困難を共に乗り越えてきた仲間たちと超えるゴールは、何よりも得難い達成感があります。その歓喜の瞬間が訪れるまで、自己欺瞞をやめ、本心を貫き、悔いのない補習校生活を送ってください。

答辞(Ⅱ)

――校高等部卒業生代表 高橋 悠真

春の訪れを感じる今日の良き日を迎え、私達、1校高等部二年十名は卒業します。本日は、このように厳かで、晴れやかな卒業式を挙げていただき、心より感謝いたします。

入学からの年月を振り返ると、私達は、様々なかけがいのない体験をしてきました。中学三年までおよそ十八人もいたクラスは高校に進学するとわずか十人にまで減ってしまいました。最初は驚きましたが、小学校からの付き合いがあった私達は今まで通り変わらない土曜日をおくり、むしろより仲の良いクラスになったと実感しました。高校一年では様々なことを一つ上の先輩から学び、彼らに憧れ、尊敬しました。先輩と共にした一年はあっという間に過ぎ行き、どう

どう私達が中学生、後輩達を引っ張っていく立場になりました。

高校二年に進級し、まず行われたのが、生徒会執行部とクラス委員を決める選挙でした。それまでの自分は、立ちはだかる壁を目の前にすると、はじめから無理だと決めつけ、立ち向かおうともしませんでした。しかし、補習校生活最後の年、そういう逃げてしまう自分や楽をする自分が嫌になりました。選挙の前日、私は「清水の舞台から飛び降りる」覚悟で、生徒会長に立候補しました。そして当選したことを昨日のように覚えています。

生徒会長としての最初の大事な仕事は運動会でした。一年の中でも最も盛り上がり、最も思い出を作る行事であるため、皆の期待に応えられるような、公平、かつ誰もが楽しめる運動会にする必要がありました。そのために何を留意すべきなのかを確認することや、中高生徒への連絡など入念な準備が必要でした。そのために、あまり話す機会がなかった下級生にたちと踏み込んだ話をするようになりました。たわいのない雑談や現地校の大変さを愚痴っているうちに、先輩後輩という垣根が取り払われ、ただ普通の友達のような接し方ができるようになりました。コミュニケーションの取り方、そしてその重要さを学べたのは、「清水の舞台を飛び降り」たからこそ得ることができた「こ褒美」でした。

また、平日の現地校生活で疲れているにも関わらず、不思議と補習校に行く疲労を感じなくなることが度々ありました。大声で「おはようございます」と叫ぶ友から元気をもらい、「腹減ったあ〜」とつぶやく友と視線でうなずき、親父ギャグを挟む友に大笑いした時間。補習校で疲れがとれたのは、お互いを分かち合える仲間の存在とたわいのない時間があつたからこそであると感じています。当たり前だった日々が、これから当たり前でなくなること、一抹の寂しさも感じています。これまで先生方から教えていただいたこと、そして仲間と過ごした中で得たことは計り知れず、私たちの今後の人生における貴重な財産です。

私たちは十七、十八歳となりました。自分なりの価値観や信念を持つようになりまし。思春期という成長過程で、親と対立し、分かり合えない時もありました。それでも、親は、当たり前ですが、私たちをここまで育ててくれました。私たちはしたいに自立し、親離れをしていきます。しかし、どれだけ大きくなって、いつも暖かく見守ってくれていることを決して忘れません。改めて言うのは恥ずかしいけれど、たぶん、今日しか言えないのでこの場を借りてお礼を言わせてください。

「今日まで育ててくれてありがとう。見守ってくれてありがとう。」
ここに立つまでの濃かった年月も、あっという間に過ぎ去りました。この二年間でたくさん悩み、たくさん驚き、たくさん笑いました。そうやって、少しずつ私達は大人になってきました。ここで得た多くの思い出、自信や誇り、そして仲間

たちとのかけがえのない絆。今までの時間を糧として、私たちは自ら選んだ新しい道を、堂々と歩み続けることを誓います。